『周防内侍集』注釈（四）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 順子, ONO, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069052

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『周防内侍集』注釈（四）

Commentaries of “Suou no naishi shu” (4)

大野順子

Junko ONO

もろともにありし母はらからなども、みな亡くなりて、心細く覚えて、住み憂き旅所にわたりて仏など供養するに、草なども繁く見えしかば

30　住みわびて我さへのきのしのぶ草しのぶるかたの繁き宿かな

【底本】

もろともにありしはゝはらからなともみなゝくなりて心ほそくおほえてすみうきたひところにわたりてほとけなとくやうするにくさなともしけくみえしかはすみわひてわれさへのきのしのふくさしのふるかたのしけきやとかな

【他出】

○『金葉集』二度本・雑上・五九一

家を人に放ちてたつとて、柱に書きつけ侍りける

周防内侍

住みわびて我さへのきのしのぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

○『今鏡』うちぎき第十・一四一

堀河の帝の内侍にて、周防とか言ひし人の、家を放ちてほかに渡るとて柱に書きつけたりける。

住みわびて我さへのきのしのぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

と書きたる。まだその家は残りて、その歌も侍るなり。見たる人の語り侍りしは、いとあはれにゆかしく。その家は、かみわたりにいづことかや。「冷泉堀河の西と北との角なるところ」とぞ人は申しし。おはしまして御覧ずべきぞかし。まだ失せぬ折りに。

○『新時代不同歌合』二二五　＊右方は平政村。

卅八番　左　周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそ惜しけれ

契りしにあらぬつらさも逢ふことのなきにはえこそ恨みざりけれ

住みわびて我さへのきのしのぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

○『兼載雑談』九〇

一、住みかねて我さへのきの忍草しのぶかたがた繁き宿かな

周防の内侍、家を賣りてよめるうたなり。

【通釈】

一緒に暮らした母やきょうだいなども、みんな亡くなって、心

令和4年10月1日受理

細く感じられて、住むのがつらい仮住まい（となってしまった自邸）に移って仏の供養をしているときに、草なども茂っているように見えたので。

住みにくく、私でさえも立ち去りたくなる（ほどひどく繁った）軒の忍ぶ草であるよ。（おかげで、その忍ぶ草の名のとおり、亡き人を）偲ぶことの多い家だなあ。

【参考歌】

①ふるさとの花の都に住みわびて八雲たってふ出雲へぞゆく
（後拾遺集・別・四九六・大江正言）

②すみわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜半の月かな
（千載集・雑上・九八八・藤原俊成）

③いたづらにたたずむのきのしのぶ草なれさへ袖に露なこぼしそ
（艶詞・四八）

④世の中を思ひのきばのしのぶ草いく代の宿と荒れかはてなむ
（玉葉集・雑三・二二五一・藤原定家）

⑤如何せんしのぶの草も摘みわびぬ形見と見えし子だになければ
（拾遺集・哀傷・一三一〇・よみ人しらず）

【語釈】

○もろともにありし母はらからなども、みな亡くなりて、心細く覚えて…「はらから」は兄弟姉妹。「もろともにありし」がかかるのが「母」のみであるのか、「母はらから」であるのか、詞書からは判断がつかない。周防内侍の母は、加賀守従五位下源正職女（生没年未詳）。周防内侍の兄弟姉妹は、『尊卑分脈』によれば比叡山の律師の朝範と平等院座主の忠快という兄二人がいる。そのほかに兄弟姉妹がいたかは不明。周防内侍の没とほぼ同時期の天仁三年（一一一〇）に、朝範（内侍の兄を指すか確実ではない）が平等院三昧職におされた記事が『朝野群載』にみえる。『今鏡』（村上の源氏）には、百首歌を詠んでくれたら逢うと「師頼の大納言」に告げたにもかかわらず結局逃げてしまった女を「周防内侍がゆかり」と記す。この女について、稲賀氏は「妹であろうか」、増淵氏は「姪のような関係の女」、上村氏は「近い血縁」とする。**○住み憂き旅所にわたりて仏など供養するに、草なども繁く見えしかば**…「仏など供養する」とは亡き家族のための法会を営むこと。「旅所」は仮の住まいのことだが、ここでいう「旅所」は周防内侍の実家とするのが穏当であろう。『狭衣物語』（巻三）では、一品宮と結婚した狭衣が、気の進まない通い所となる一条院を「旅所」と表現する。狭衣にとっての一条院のように、掌侍として内裏で日々を過ごす周防内侍にとっては、実家が一時的な住まいという意識であった。周防内侍の邸は、冷泉小路と堀河小路が交わった北西の隅あたりの、大内裏からさほど遠くない場所にあったと『今物語』に語られている。建久期頃も荒廃したようすながら形を留めていたらしく、西行や隆信はその壊れかけた家の柱に本詠が書きつけられているのを見たという。【補説】参照。ところで、『金葉集』は、歌を書きつけたのは邸を手放すときであったとする。この記述は、周防内侍と交流のあった俊頼が当時の状況を知っていたことによるのか、あるいは「我さへのきの」という表現から引き出されたものか不明。周防内侍が法事のために邸にやってきた時期も不明。**○住みわびて**…詞書にある「住み憂き旅所」を受けた句。仮住まいの住みにくさとともに、家族を失った我が身の寄る辺なさも「住みわびて」に響いている。この句は、周防内侍以前には、住みづらさのために京都から出雲へと旅立つときに詠まれた①にみえる。内侍詠以降には、住みづらくなって身を隠したはずの山里を暴くように月がくまなく差すことを詠んだ②のように、しばしば初句で用いられる。**○我さへのきのしのぶ草**…軒に「しのぶ草」が生えていることから「しのぶるかたの繁き」が引き出されて、亡き人を偲ぶのに絶え間がないことを実感。「住み憂き旅所」の「軒」から（空間的に）「退き」たいという思いに、

家族を偲ぶつらさから（心理的に）「退き」たいという思いも重なる。「軒」は、降りかかる「雨」や「雫」といった水の類いや、軒に葺く「菖蒲」、軒に生える「草」と詠まれやすい。「忍ぶ草」はシダ類の植物でノキシノブのこと。単に「しのぶ」とも。古い家の軒にしばしば生えることから、荒れた寂しい家と結びつきやすい。「忍ぶ草」は、心情をあらわす「しのぶ」（忍ぶ・偲ぶ）と掛けられやすい。本詠の影響を感じる歌として③・④がある。**〇しのぶるかたの繁き宿かな**…「しのぶるかた」には先行例がない。『金葉集』などの本文で用いられている「しのぶかたがた」でも意味は変わらないが、「かたがた」・「繁き」と数多さを感じさせる句を重ねることで嘆きの深さを印象づけたのであろう。心情を表す「しのぶ」は、「忍ぶ」ならば、人に知られぬよう堪える、秘密にする、「偲ぶ」ならば、しみじみと思い起こす、賞美する、という意になる。「忍ぶ」は恋の初めに、「偲ぶ」は離れていった人を思う時に用いられやすい。⑤は「しのぶ草」に「偲ぶ」を掛けて、今なお忘れ得ぬ亡妻に加えて子までも失ったことを歌う。「繁し」には、草木が「茂り重なっている」ことに、亡き人を「絶え間なく」思い起こすことが重なる。「繁し」は繁茂した草木のようすと結びつきやすいことから、八重葎などと詠みあわせられて、荒れて寂しいさまを表現することもあった。「繁き宿かな」は、ほかには『壬二集』（二九三四）にしか用例が残らない句。

【補説】

周防内侍詠としては『千載集』や『百人一首』に選ばれた七番歌が著名であるが、本詠も同時代以降の歌人に注目されている。

注目された大きな要因は、この歌に詠じられた家がその筆跡とともに長らく姿をとどめていたことにあろう。【他出】にあげたように、『今鏡』では「おはしまして御覧ずべきぞかし。まだ失せぬ折りに」と、失われてしまう前に見に行くべきだと推奨している。また、『無名抄』では、貫之や業平といった高名な歌人たちの旧宅に関する記述と並記されていて、鎌倉前期における周防内侍邸への関心の高さがうかがえる。後にあげるように、西行や隆信も邸を訪問して歌を詠じている。

周防内侍の旧宅を語る『今物語』のなかには、神主経国が貴人を迎えるために掃除を行わせた折に、しかるべき人々が柱や長押などに書きつけておいた歌々までも削り取られて悲嘆にくれた話が残されている。寺社参詣や旅の途次、家移り、亡き人の邸を訪れた時など、人々は訪れた場所の柱や妻戸にしばしば歌を書き残し、後代の人々がそうした遺物を珍重するということがしばしばみられた。

周防内侍の場合も、旧宅の柱に和歌が残されていたことで、同時代以降の歌人らに強い印象を残したのであろう。

▽『山家集』・七九九

周防内侍、「我さへのきの」と書きつけける故郷にて、人人思ひを述べける

いにしへはついゐし宿もあるものを何をか今日のしるしにはせん

▽『隆信集』寿永本・一一〇

昔の周防内侍の家の柱に、「我さへのきのしのぶ草」といふ歌書きつけたるところに、人人まかりて、「古郷懐旧」といふ事をよみしに

これやその昔の跡と思ふにもしのぶあはれのたえぬ宿かな

▽『隆信集』元久本・八六四

昔、周防の内侍の故郷の柱に、「我さへのきのしのぶ草」といふ歌書き置きたるあとの、近頃まで破れ歪みながらありしを、人人まかりて「故郷懐旧」と言へることを詠めりしに

これやその昔の跡と思ふにもしのぶあはれのたえぬ宿かな

▽『今物語』

昔の周防内侍が家の、あさましながら、建久の比まで、冷泉堀川

の西と北との角に朽ち残りてありけるを、行きて見ければ、
　我さへのきのしのぶ草
と、柱に昔の手にて、書き付けたりしがありける。いとあはれなりけり。これを見て、ある歌よみ書きつけける。
　これやその昔の跡と思ふにもしのぶあはれのたえぬ宿かな

▽『無名抄』
また、周防内侍の「我さへのきのしのぶ草」とよめる家は、冷泉堀川の北と西の角なり。

▽『万代和歌集』雑二・三〇九八
　周防内侍、「我さへのきの」と書きつけたりける宿の、近頃まで侍りけるを、人人見にまかりて「故郷懐旧」と言ふことをよみ侍りけるに　藤原隆信朝臣
これやその昔の跡と思ふにもしのぶあはれのたえぬ宿かな

三月ばかり、師賢の弁、窓の前より過ぎけるままに、山吹一枝おこせたれば、遠くならぬ先にとて、葉に書きつけてとらせし

31　嬉しくも八重山吹を見するかなとへども君を思ひかけぬに

【底本】
　三月はかりもろかたの弁まとのまへよりすきけるまゝにやまふきをひとえたおこせたれはとほくならぬさきにとてはにかきつけてとらせし
うれしくもやへ山吹をみするかなとへともきみをおもひかけぬに

【通釈】
　三月ごろ、師賢の弁が窓の前を通り過ぎた際に、山吹を一枝よこされたので、（師賢が）離れてしまう前にと、（周防内侍が、山吹の）葉に（歌を）書きつけてやった。
嬉しいことに、八重咲きの山吹を見せてくださるのですね。訪ねてくださっても、あなたを恋い慕わないのに。

【参考歌】
　上東門院后宮と申しける時、上の御局におはしますに、道信朝臣山吹花を持ちて通るに、御達の端に見えければ、花をさし入るとて歌の本を言へりければ、奥に侍るを、「かれ取れ」と宮の仰せごとありければ、取るとて末を言ひける
　伊勢大輔
①くちなしにちしほやちしほ染めてけりこはえもいはぬ花の色かな
　（続詞花和歌集・聯歌・九三五）
　実方の、馬命婦と物いふ折りに、屏風の上より、山吹の花を投げさせ給たりければ、さぞと心得てきこえさせける
②八重ながら色もかはらぬ山吹の九重になど咲かずなりにし
　おほん返し
　九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をば知る人もなし
　（円融院御集・八／九）
　仮初めばかり思ひし人の、まめやかに語らふ人出で来ぬと聞きて、移ろひたる萩の下葉に書きて
③うつろふは下葉ばかりと見しほどにやがてあきにもなりにけるかな
　（馬内侍集・一四六）
　九月ばかりに、ものに詣でて泊まりたるに、傍らの局に少し人の声のすれば、樒の葉に書きて置かす
④憂きよにはあらしの風に誘はれて来しやまがはに袖も濡らしつ
　（和泉式部続集・七）
⑤嬉しくも桃の初花みつるかな又こむ春もさだめなき世に
　（公任集・一三）
⑥とへとしも思はぬ八重の山吹を許すと言はばをりに来むとや
　（後拾遺集・雑二・九六三・和泉式部）
　人のもとより

数ならぬ人のひとへに山吹の八重九重といかで知るらむ
返し
⑦九重の八重山吹は知りたれどとへと言へとは君ぞ教へし
（相如集・四／五）

【語釈】

○三月ばかり、師賢の弁、窓の前より過ぎけるままに、山吹一枝おこせたれば…ある年の三月ごろのこと。師賢が弁官であったのは、右少弁となった治暦元年（一〇六五）から左中弁で没した永保元年（一〇八一）までなので、この間のやり取りとなる。源師賢（長元八年（一〇三五）～永保元年七月二日　四七歳）は、父が兵部卿資通、母が源頼光女。治暦元年に蔵人、右少弁。承保四年（一〇七七）正月に正四位下。承暦四年（一〇八〇）八月に左中弁、同年一二月に蔵人頭。父から神楽と和琴を相伝。和琴奏者として御遊に奉仕した。承保二年（一〇七五）の『殿上歌合』と承暦二年（一〇七八）の『内裏歌合』に出詠。梅津の山荘で源経信や源頼家らと歌会を催したほか、『四条宮下野集』に贈答歌が残る。『後拾遺集』以下の勅撰集に一七首入集。「窓」は、四五番歌に「局の窓」とあるのと同じく、周防内侍の局に設けられた窓のことと思われる。「山吹」はバラ科の落葉低木で、晩春から初夏に黄色の花をつける。古くから歌に詠まれ、井出の山吹はしばしば蛙（かはず）と取り合わせられた。本詠は、「遠くならぬ先にとて」と素早い返歌を目指していることから、女房と廷臣の遊戯的な贈答とみられる。山吹をあいだに挟んだ①の連歌は、殿上人と女房の機知に富んだやりとりとして広く認知されていたらしく、『袋草紙』や『八雲御抄』にもみえる。しかし、道信と伊勢大輔の生没年から、実際にあったやりとりとは考えられない。山吹を題材とした贈答として、円融院が山吹を投げ入れたことによってはじまる実方との贈答歌②もあり、これはのちに『新古今集』（一四八〇・一四八一）にとられている。**○遠くならぬ先にとて、葉に書きつけてとらせし**…植物の葉に歌を書いて送ることはしばしば行われており、心変わりした男に変色した萩の葉に書いて詠み送った③や、通夜の折に偶然行き会った知人へ、楤の葉に書いた④などがある。**○嬉しくも**…嬉しいことに桃の初花が咲いたのを見たよ、と歌う⑤は、本詠と構成が近い。**○八重山吹を見するかな**…わざわざ「八重山吹」としたのは、下の句の「十重」との対応による。三句切れ。**○とへども君を思ひかけぬに**…山吹を手に訪ねてくださっても、あなたに恋心は抱かないと、恋の贈答に取りなして歌をおくっている。「十重」は山吹の縁語で、上の句の「八重」に対応。長らく訪れのなかった男に、訪れてほしいと思っていないと拒む⑥や、山吹の花弁の重なりにこと寄せて恋心を詠みあった⑦の贈答歌でも、「訪へ」に山吹の縁語となる「十重」が重ねられている。

【補説】

窓から差し入れられた山吹の一枝に対し、恋の風情を醸しつつ即応したところに、本詠の面白さがある。

廷臣からの仕掛けに、女房が機知に溢れた対応をみせた例として、『枕草子』の清少納言と公任のやりとりは夙に知られている。「少し春ある心地こそすれ」と詠みかけられた清少納言は、公任の句の出典が『白氏文集』の「南秦ノ雪」にみえる「二月山寒少有春」であることを理解した上で、同じ「南秦ノ雪」の「三時雲冷多飛雪」を用いて付け句に仕立ててみせた。この返答は、公任とともに清少納言の返しを待ち受けていた殿上人に、大変な評判をとったという結末で結ばれている。

本詠もこれと同様に、山吹を一枝送ることで相手がどのような反応を示すか、師賢のほうに試す気持ちがあったのではなかろうか。あるいは、『枕草子』と同じく、師賢の後ろには興味津々にことの推移を見守る殿上人らが控えていたのかもしれない。

ところで、参考歌①・②や、次にあげる二首のように、「山吹」

は古くから機知や即興と結びついてきた。

山吹の花色衣ぬしや誰とへどこたへずくちなしにして
（古今集・誹諧歌・一〇一一・よみ人しらず）

小倉の家に住み侍りける頃、雨の降りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍けり、心も得でまかり過ぎて又の日、山吹の心得ざりしよし言ひにおこせて侍ける返りに、言ひつかはしける　中務卿兼明親王

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞあやしき
（後拾遺集・雑五・一一五四）

師賢が黙して「山吹」の枝を差し出したのに対して、素早く歌を返した周防内侍は、「嬉しくも」と詠み出すことで、まずは美しい山吹に対する返礼であることを示しつつ、下の句では「とへども君を思ひかけぬに」と男の恋心を押し返す女のようすへと転じている。

男からの不意打ちに、茶目っ気たっぷりに応じてみせた本詠は、自信作として家集に残されたのではなかろうか。『百人一首』にも選ばれた七番歌や、紅葉を一枝差し入れられて詠じた二一番歌など、男性からの仕掛けに対して当意即妙に歌を返す姿は、本集にたびたび見られる。

こうした即興性に優れた周防内侍の才能は、歌を詠みかける側としても発揮されている。『続詞花和歌集』九四四（『袋草紙』一六一）では、火桶を取りにきた永実に対して、周防内侍から連歌の前句を言いかけている。

堀河院御時、中宮の御方に上わたらせ給ひて、蔵人永実を召して御所に侍りける薫物の火桶を召しに遣はしたりければ、絵かきたる桐火桶をとらすとて、周防内侍歌の末を言へりければ、取るとて　藤原永実

花や咲き紅葉やすらんおぼつかな霞こめたるきり火桶かな
（続詞花和歌集・聯歌・九四四）

鳥羽殿造りはじめさせ給ふに、「もとのままの池の汀に行きて見よ」と仰せ言ありしかば、人人、東宮の大夫の宰相の中将など聞こえし、具し給ひて、その御宿直所にて見れば、臨時の祭の人人青摺姿にて帰りしかば

32　いかにして大宮人の過ぎぬらん心のとまる宿のけしきを

【底本】

とはとのつくりはしめさせたまふにもとのまゝの○（いけの）みきはにいきてみよとおほせことありしかは人〳〵東宮の大夫のさい相の中将なときこえしくしたまひてその御とのゐところにてみれはりんしのまつりの人〳〵あをすりすかたにてかへりしかはいかにしておほみや人のすきぬらんこゝろのとまるやとのけしきを

【通釈】

（白河天皇が）鳥羽殿の造営をはじめられた頃に、「（藤原季綱の山荘の面影を）もとのままにとどめている池のほとりを行って見てきなさい」とのお言葉がございましたので、（お仕えしていた）人々は、そのころ宰相中将などと申しあげた東宮大夫（藤原公実）とご一緒して、その御宿直所で池を見ていると、（石清水）臨時祭に奉仕した人々が小忌衣の姿で帰っていったので、

どうやって（小忌衣に身を包んだ）大宮人たちは通り過ぎていくのでしょうか。心ひかれる鳥羽殿の景色を（立ち止まってみることもなく）。

【参考歌】

①ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ
（新古今集・春下・一〇四・山部赤人）

②いかにして過ぎにしかたを過ぐしけんくらしわづらふ昨日今日かな
（千載集・雑上・九六六・皇后宮定子）

③いかにして秋の日数も過ぎぬらん山路通さぬ菊の香りに

④さらでだに心のとまる秋の野にいとどもまねく花薄かな
（長綱集・一四三）

（後拾遺集・秋上・三二六・源師賢）

⑤里ごとに叩く水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん
（金葉集二度本・夏・一四二・藤原顕綱）

【語釈】

○鳥羽殿造りはじめさせ給ふに…詞書をそのまま受け取るならば、白河天皇が鳥羽殿の造営をはじめた頃のこととなるが、続く状況からみて、本詠は鳥羽殿の竣工間もない頃に詠まれたと考えられる。「鳥羽殿」は、白河天皇の後院として造営された鳥羽離宮のことで、「城南の離宮」とも。「鳥羽」は、東を鴨川、西を桂川に挟まれた景勝の地。そこに造営された鳥羽殿は、朱雀大路の南端から鳥羽まで直線で南下していく鳥羽作道と西辺で接し、全体の半分以上を占める池泉があった。もとは備前守藤原季綱の山荘であったが、応徳三年（一〇八六）に白河天皇へ献上され、同年七月から離宮の造営がはじまった（『扶桑略記』一〇月一三日条）。**○「もとのままの池の汀に行きてみよ」と仰せ言ありしかば**…季綱の山荘の面影を残している池を見物しておいでと近侍する女房たちを促した白河天皇の言葉。『扶桑略記』の応徳三年一〇月条には、「池広南北八町、東西六町、水深八尺有余、殆近九重之淵、或摸於蒼海作嶋、或写於蓬山畳巌、泛船飛帆、煙浪渺々、飄棹下碇、池水湛々、風流之美不可勝計」とある。**○東宮の大夫の宰相の中将などきこえし**…のちに鳥羽天皇の東宮大夫をつとめた藤原公実が、まだ宰相中将だった頃の出来事であったことをいう。ただし、後述するように、公実が宰相中将であった間に鳥羽殿で石清水八幡宮の臨時祭にめぐりあうことはできず、詞書全体に年代的な錯誤がある。一方で、本詠の詞書が公実が東宮大夫を務めていた頃に過去を回想して書かれたものと考えるならば、本集の執筆時期の手がかりとなりうる。藤原公実（天喜元年（一〇五三）～嘉承二年一一月一四日　五五歳）は、閑院流の藤原実季男、母は大宰大弐藤原経平女。号は三条大納言。堀河天皇の女御苡子（鳥羽天皇母）は妹。妻は従二位光子（堀河・鳥羽天皇の乳母）。子は、実行（三条）・通季（西園寺）・実能（徳大寺）、鳥羽天皇中宮の待賢門院璋子（崇徳天皇・後白河天皇の母）など。白河院の近臣。承保二年（一〇七五）六月に左近衛中将。承暦四年（一〇八〇）一月に蔵人頭、同年一二月に参議、左近衛中将はもとのまま。寛治元年（一〇八七）年一月に権中納言、康和二年（一一〇〇）七月に権大納言。康和五年（一一〇三）八月に鳥羽天皇の東宮大夫となり、嘉承二年（一一〇七）七月の鳥羽天皇の受禅によって東宮大夫を停められた。白河・堀河朝を代表する歌人のひとり。承保二年九月の『殿上歌合』や承暦二年四月の『内裏歌合』、『堀河院艶書合』、『堀河百首』等に出詠。『堀河院艶書合』では周防内侍と贈答している。『堀河百首』の三条本奥書（神宮文庫蔵）は大江匡房が題者、藤原公実が勧進者となって奏覧したとする（上野理『後拾遺集前後』笠間書院・一九七六年。竹下豊『堀河院御時百首の研究』風間書房・二〇〇四年）。『後拾遺集』以下の勅撰集に五七首入集（『金葉集』二度本の異本歌二首を含む）。**○その御宿直所にて見れば**…周防内侍らは公実の御宿直所で池を見た。「宿直所」は、宿直や休憩をするための部屋で、直廬とも。鳥羽殿における公卿の宿直所は、『中右記』康和五年一一月五日条や『兵範記』久寿二年二月六日条で、離宮御所の中でなく作道の西方にあったとされる。**○臨時の祭の人人、青摺姿にて帰りしかば**…石清水臨時祭に奉仕した人々が小忌衣姿で都の方へと通り過ぎていった。「臨時の祭」は、本詠と同時の詠と考えられる三二番歌が晩春の歌であることから石清水八幡宮の臨時祭とするのが穏当。そのように考えるならば、本詠は鳥羽殿竣工の翌年にあたる寛治元年三月の石清水臨時祭の日の詠となる。しかし、公実は寛治元年一月には権中納言になっているので官職に齟齬が生じ

る。公実が東宮大夫であった間に『周防内侍集』がまとめられて、そこから当時を回想したために官職を誤ったものか。石清水臨時祭は、京都府八幡市にある石清水八幡宮の祭で、天慶五年（九四二）に平将門・藤原純友の乱平定の報賽のために臨時に行われたのが始まり。天禄二年（九七一）からは「臨時祭」の名称のまま恒例となって、毎年三月に行われた。「青摺姿」は、小忌衣を身につけた姿のこと。小忌衣とは、神事の際に奉仕する官人が装束の上に着用する青摺りの衣のこと。白布に小鳥や草などの文様を山藍で青く摺り染めにした狩衣に似た形の衣で、右肩に赤紐を二本垂らす。**○いかにして大宮人の過ぎぬらん**…詞書の「その御宿直所にて見れば、臨時の祭の人人、青摺姿にて帰りしかば」を受けて、臨時祭に奉仕した人たちは、この鳥羽離宮の素晴らしさを、どのような心持ちで見たのだろうかと歌う。「大宮人」は、①のように宮中に仕える官人の意で用いられるが、本詠では小忌衣を身につけて臨時の祭に奉仕した人々を指す。里下がりしている清少納言に対して定子が詠みおくった②で、あなたはどのようにお過ごしかと尋ねたように、本詠は臨時祭に奉仕する人々の気持ちを思いやることで、素晴らしい風景を楽しむ自分たちとの対比を作りあげている。後代に、どのようにして秋は過ぎていったのかと詠んだ③で類似の句が用いられている。**○心のとまる宿のけしきを**…あまりに素晴らしい景色であるため、私たちは帰りかねているのに、それを見捨てるかのように小忌衣の大宮人たちは進んでいくのだなあ、という心。「心のとまる」に、宿泊地としての「泊まる」や帰りかねて足が「止まる」が重なる。「心のとまる」という句は、秋に心惹かれていることを詠じた④が先行例として見えるほか、同時代詠の⑤では心ひかれる宿がないのかあちこちで水鶏が戸を叩く音がすると歌われる。

【補説】

詞書によれば、「鳥羽殿造りはじめさせ給ふ」頃に、白河天皇の仰せを受けて離宮を訪ねた周防内侍が、公実の宿直所から「臨時の祭の人人、青摺姿にて」帰っていく姿を目撃している。このことから、本詠は、鳥羽殿が竣工した翌年の寛治元年三月の石清水臨時祭の日の詠と考えられる。しかし、そのように詠作時期を設定すると、語釈に示したように公実の官職に錯誤が生じる。

三二番と三三・三四番を別の時のことと見ることも可能ではある。しかし、詠歌内容や登場人物の共通性から、三二～三四番歌までは同じ折りの歌が並べられたとみるのが自然で、やはり藤や山吹が咲く春の終わり近い頃に、まとまって詠まれたとみるべきであろう。

また、『中右記』寛治元年（一〇八七）二月五日条には、白河上皇がはじめて鳥羽殿へ行幸を行った記録が残されている。応徳三年一一月の堀河天皇の即位以降、周防内侍は掌侍として内裏に仕えていたとみられるが、主上はいまだ幼く、父白河上皇の意向はそこに反映されたと考えられる。本詠も、鳥羽離宮造営の下命者である上皇が、寛治元年二月に鳥羽離宮を訪れた後に、親しく仕えていた人々にも新造の離宮を見物してくるよう心遣いをしたことからうまれたのではなかろうか。

池の汀の藤山吹など、聞きしよりも見るにまさりてをかしう、飽かず思ひながら、ひき続きて帰る道に、車よりのたまへる　宰相の中将

33　山吹の花の盛りに越へるとてうらみぞかへるきしの藤波

【底本】

いけのみきはのふちやまふきなときゝしよりもみるにまさりてをかしうあかすおもひながらひきつゝきてかへるみちにくるまよりのたまへる　さい将の中将

山吹の花のさかりにこへるとてうらみそかへるきしのふちなみ

【通釈】

池のほとりの藤や山吹などは、聞いていたよりも実際に見たほうが優れて風情があり、見飽きることがないと思いつつ、連なって帰る道すがら、車からおっしゃる。

宰相の中将（公実）

山吹の花盛りに通り過ぎていくというので、恨んで戻っていくよ、岸辺の藤波は。

【参考歌】

①紫の波たつ宿と見えつるはみぎはの藤の咲けばなりけり

（範永集・一三四）

②山吹の花の盛りはかはづ鳴くゐでにや春の立ち止まるらん

（中務集・七五）

③逢ふ事のなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立帰りける

（古今集・恋三・六二六・在原元方）

④みるもなくめもなき海の磯に出てかへるがへるもうらみつるかな

（後撰集・恋四・七九九・紀友則）

⑤ふるさとの花をも思ふ山ざくらちるをみすててかへりがたさよ

（公任集・三七）

中宮に渡らせ給ひて帰り給ひて、藤にさして奉らせ給ひける

⑥かへるをばうらみやすらむ藤の花心あはむと契りつれども

（村上天皇御集・八六）

⑦我が宿に咲ける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ

（古今集・春下・一二〇・凡河内躬恒）

【語釈】

○池の汀の藤山吹など、聞きしよりも見るにまさりてをかしう、飽かず思ひながら…「池」は、三二番歌にみえる鳥羽離宮の池のこと。本詠は、鳥羽離宮の池を見物した帰り道での贈答歌とみるのが穏当であろう。「山吹」は三一番【語釈】参照。「藤」は、山吹と同じく春の終わりから夏の初めにかけて咲く花。紫の波が立っているように見えたのは藤の花であったと歌う①のように、水辺に咲くさまも詠まれる。**○ひき続きて帰る道に、車よりのたまへる**…車を連ねて都に帰る道中、公実が車のなかから、別の車に乗っている周防内侍に歌を詠みかけてきた。**○宰相の中将**…「宰相中将」は三二番歌と同じく藤原公実のこと。公実については三二番【語釈】参照。「宰相の中将」について、稲賀氏は公実とし、上村氏は可能性のある複数の名をあげて確定しがたいとしつつ、「但し、三十二番の歌の詞書にある東宮の大夫の「さい将（ママ）の中将」と同一人を指すとすると公実になる」と述べる。**○山吹の花の盛りに越へるとて**…「越へる」は「波」の縁語。山吹の花盛りには春が井手に足を止めるのかと②で歌われる。本詠では花の盛りを無情にも通り過ぎていくことから、第四句に「恨み」が詠まれた。**○うらみぞかへる**…花を見捨てて都に帰る人々を恨むかのように、藤の枝が風にたなびくさまを詠む。「浦」・「返る」は「波」の縁語。波が浦を見るだけで返るように、逢うこともなく恨みながら帰ると詠む③や、返事をよこさない女に対して幾度も浦を見るようにあなたを恨むとする④のように、波にかかわる言葉を連ねた歌の中で「浦」と「恨み」を掛けた歌が詠まれている。⑤が花を見捨てて帰る人の心のうちが穏やかでないことを詠むのとは反対に、本詠は帰っていく人に対して未練をもつ花の心を想像している。⑥では、村上天皇が藤原氏の血筋である中宮安子を「藤の花」に喩え、帰っていく私を怨んでいるだろうかと藤の花の心を思いやるていで詠んでいる。**○岸の藤波**…「藤波」は、藤の花房が風にたなびくさまを波に見立てたもの。四句と五句が倒置。⑦は邸に咲いた藤の花のようすを波が立ち返るようだとする。

【補説】

三二番歌が鳥羽離宮の美しい景色など気にかけぬように帰って行った大宮人を詠じたのに対し、本詠では盛りの花を見捨てて帰ら

なくてはならない我が身についての贈答となっている。公実が、花を見捨てて帰る我々を花はきっと恨んでいる、と歌いかけてきたのに対し、周防内侍は三四番歌でその花に歌いかける形で応えている。

返し

34　たちかへる心のほどを思ひやれ都忘るる池の藤波

【底本】
返し
たちかへる心のほとをおもひやれみやこわするゝいけのふちなみ

【通釈】
（周防内侍の）返歌
（花を見飽かぬまま、都へ）戻る心のうちを察してください、（離宮の美しさに心惹かれて）都を忘れている池の藤波よ。

【参考歌】
■①春霞たちかへるべき空ぞなき花のにほひに心とまりて
（金葉集二度本・春・三五・院御製（白河院））
②年へたる人の心を思ひやれ君だに恋ふる花の都を
（千載集・離別・四八六・源資通）
③忘るなよ姨捨山の月みても都をいづる有明の空
（千載集・離別・四九六・藤原頼実）
④尋ねくる人は都をわするれどねにかへり行く山桜かな
（長秋詠藻・二一五）

【語釈】
○返し…周防内侍の返歌。**○たちかへる心のほどを思ひやれ**…花に心惹かれつつも帰らなくてはならない心のうちをわかってほしいと藤の花に呼びかけている。「立ち返る」は「波」の縁語。花の美しさに「心とまりて」（三二番歌に類句あり）帰るべき方角を失いそうだと歌う①と共通する思いが「心のほど」の示すところ。心のうちを察してほしいと詠じた歌としては、太宰大弐の任はてた資通が都を恋しく思っている心のうちをわかってほしいと詠む②もある。**○都忘るる池の藤波**…離宮の素晴らしさゆえに、都を忘れている池の藤波よ。公実が「岸の藤波」と詠じたのを受けて、周防内侍は「池の藤波」と表現した。近い時代には、姨捨山の名月に心を奪われて都の空を忘れてくれるなと③で歌われた。のちには「花留客」という題で、花の素晴らしさゆえに都に帰ることを忘れることを詠んだ④がある。

【補説】
三二番から本詠まで、新造の鳥羽離宮を訪ねた折りの歌が並んでいるとみておく。

ある殿上人、桜本といふ所にありと聞きて、四月一日にやりし

35　今日はいとどさくらもとこそゆかしけれ春の形見に花や残ると

【底本】
ある殿上人さくらもとゝいふところにありときゝて四月一日にやりし
けふはいとゝさくらもとこそゆかしけれ春のかたみに花やのこると

【他出】
○『玉葉和歌集』夏・二九八
桜本といふ所に住む人のもとに、四月一日、言ひつかはし侍りける　周防内侍
今日はいとどさくらもとこそゆかしけれ春の形見に花や残ると
○『万代和歌集』夏・五〇八
桜本といふ所に住む人のもとに、四月一日、言ひつかはしける　周防内侍
今日はいとどさくらもとこそゆかしけれ春の形見に花や残ると

○『歌枕名寄』巻五・山城国五・桜本・一六三五

今日はいとさくらもとこそゆかしけれ春の形見に花や残ると

【通釈】

ある殿上人が、桜本というところにいると耳にして、四月一日に歌を詠み送った。

今日はとりわけ桜本のことが知りたいですよ、春の形見に（桜の）花は残っているのかと。

【参考歌】

故北方の御墓を拝みに、師殿、中納言殿もろともに桜本にまいらせ給ふ。あはれに悲しう思されて、おはせましかばと思さるるにも、涙におぼほれ給ふ。折しも雪いみじう降る。

露ばかり匂ひとどめて散りにける桜がもとを見るぞ悲しき

帥殿、

①　桜本ふる淡雪を花とみて折るにも袖ぞ濡れまさりける

よろづあはれに聞えおきて、泣く泣く帰らせ給ふ。いかで今はそこに御堂建てさせんとぞ、思し掟てける。

（栄花物語・浦浦の別・三五・藤原隆家／三六・藤原伊周）

ひととせも見し桜本の桜、まだ散り残りてやと、例の丹後内侍をしるべにし聞こえて出でたつに、暑きに、宮近き所に出でゐて、山霞に閉ぢられ、空のけしきもまだいとたどたどしう暗きほどに、急ぎ出でたれど、あなたの方より帰る車のあるを、妬たくも先立ちたる人のありけるかなとて、内侍

②思ひほのかのくるまかな

とのたまふを歌になさむとて

かけてだに

と言ひはべしかば、小左近

我よりほかに花見ける人　（出羽弁集・三七）

③名を聞けば散りての後にたづぬれど猶頼もしき桜本かな

小左近

散りがたの折にしもこそ積もりつつ桜本には盛りなりけれ

内侍

散るをだに見にとゆきつるかひありてたづね来にける桜本かな

（出羽弁集・四七～四九）

四月一日にや、「山には花のあらん、いざ見ん」と、あるすき者の申ししかば

④春だにもありへし花の都をも散りぬと聞けばあくがれぞゆく

（輔尹集・三）

四月一日まで散らぬ桜のありしを、道命阿闍梨にやりし

⑤まだ散らぬ花に心をなぐさめて春過ぎぬとも思はざりけり

（赤染衛門集・四〇五）

四月一日ごろ、盛りなる桜を人のおこせたる、瓶にさして御前に置きたるに三四日散らず、源中納言のがり遣はしし

⑥雲の上に千歳と契る君が代は花もときはの桜なりけり

（大弐集・三四）

⑦いはまがた春の花こそゆかしけれ秋のことの葉見るにつけても

（四条宮下野集・二七）

⑧我が宿の八重山吹はひとへだに散り残らなん春の形見に

（拾遺集・春・七二・よみ人知らず）

【語釈】

○ある殿上人、桜本といふ所にありと聞きて…「ある殿上人」が誰であるかは不明。「桜本」は、現在の京都市左京区。浄土寺、鹿ヶ谷町あたり一帯の古名で、冷泉天皇桜本陵がある。伊周・隆家が母の墓所のある桜本を訪れた場面で、伊周が桜の下に降る淡雪を散った花びらに見立てて歌った①がみえる。②の連歌の詞書によれば、出羽弁・丹後内侍・小左近の三人は少なくとも二度、桜本に花見に訪れている。三人はその道中で何首もの歌を詠じ、桜本という地名

を織り込んだ③をはじめとする歌々を何首も残している。しかし、桜本は歌枕としてさほど注目されていなかったのか、ここにあげた以外の用例はあまりない。**○四月一日にやりし**…夏の初めの四月一日に惜春の思いを詠じた。四月一日には更衣や郭公、卯花といった夏の素材が用いられるほか、惜春の思いを詠む際に春と夏の素材が同時に詠みこまれる。四月一日の桜に焦点をあてた歌として、盛りの遅い山桜を見に行こうとする④がある。四月一日になっても散らない桜を贈ったときの⑤や、本詠と同時代に瓶に飾られた盛りの桜を歌った⑥などのように、しばしば実景と結びつく。**○今日はいとど**…季節が夏となった今日はとりわけ。この句の用例は少ないものの、今日という日を強調する歌に用いられて、伊勢大輔（新古今集・釈教・一九七四）、赤染衛門（赤染衛門集・三〇九）、定家（拾遺愚草・一〇二八）、為子（玉葉集・雑一・一九一九）などに用例が残る。**○桜本こそゆかしけれ**…本詠は「桜本」という地名に、折を過ぎても桜が咲いているのではないかという期待をこめる。③はそうした心持ちを詠じた。⑦は『万葉集』の秋歌を集めた「秋のことの葉」（秋歌の巻）を見るにつけ、「春の花」（春歌の巻）に心引かれると歌う。**○春の形見に花や残ると**…過ぎてしまった春を偲ぶよすがとして、桜を地名に持つ「桜本」ならば、花はまだ残っているだろうかと思いをはせる。「形見」は、失ったものや人を偲ぶよすがとなるものの意。⑧は八重咲きの山吹を歌材とし、春を偲ぶよすがとして一重だけでも散り残っていてほしいとする。

【補説】

三四番歌まで春の歌が連ねられてきたのに続いて、本詠から四一番歌まで夏歌が続く。

郭公待つ心

36　**昔にもあらぬ身なれど郭公待つ心こそ変はらざりけれ**

【底本】

ほとゝきすまつこゝろ

むかしにもあらぬ身なれとほとゝきすまつこゝろこそかはらさりけれ

【他出】

○『詞花集』夏・五五

郭公を待ちてよめる　周防内侍

昔にもあらぬ我が身に郭公待つ心こそ変はらざりけれ

○『後葉和歌集』夏・八八

郭公を待つ心を　周防内侍

昔にもあらぬ我が身に郭公待つ心こそ変はらざりけれ

○『百首歌合　建長八年』四百四十五番判詞

四百四十五番　左持　寂西

なほも身にまたるる物はあしびきの山郭公のみぞ変はらぬ

右　実伊

契りおく人ありとても待たれめやかくふり吹雪く山の深雪に

「契りおく人ありとても」と思ひたえたる山家の雪中、心細さも寂しさもさこそとおしはかられ侍るに、「ふり吹雪く」といへるや猶世俗の鄙語に侍らん、左、「山郭公のみぞ変はらぬ」は、「おほかたともの」とか侍る本歌いとをかしくこそうつされて侍るに、周防内侍が「昔にもあらぬ我が身に郭公待つ心こそ変はらざりけれ」とよめるや、少し思ひ出でられ侍らん

【通釈】

郭公を待つという趣向（を詠んだもの）。

昔とは違ってしまった身の上ではあるけれど、郭公を待つ（という

風雅を愛する）心は変わらないよ。

【参考歌】

①思はんと頼めし人の昔にもあらずなるとの恨めしきかな
（金葉集二度本・恋下・四三〇・永縁）

②昔にもあらぬ姿になりゆけど嘆きのみこそ面変はりせね
（金葉集二度本・雑下・五八五・源雅光）

沙弥観西と名ある文をさしおかせたるを見れば、藤原資基が手にてあり、あやしみて使ひに問へば、かしら下ろしたる由を言ふに、詠みてつかはしける

③昔にもあらぬなぐさの浜千鳥跡ばかりこそ変はらざりけれ
（清輔集・四四三）

花見にまかりけるを聞きて、修理大夫顕季のもとよりおくられて侍りける

④春風にあらぬ身なれど桜花たづぬる人にいとはれにけり
（散木奇歌集・九三）

⑤よそにのみ恋ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は
（古今集・離別・三八三・凡河内躬恒）

⑥我が身にもあらぬ我が身の悲しきに心もことになりやしにけん
（後撰集・雑三・一二〇〇・大輔）

⑦憂きながら人を忘れんことかたみ我が心こそ変はらざりけれ
（後撰集・雑四・一二八三・よみ人しらず）

【語釈】

○郭公待つ心…郭公を待つことを歌った本詠は、四月一日の詠である三五番歌とともに初夏の歌。「郭公」は、一二番【語釈】参照。

○昔にもあらぬ身なれど…「昔にもあらぬ」とする例はそれほど多くなく、本詠とほぼ同時代あたりから用いられる。昔とはすっかり心変わりしてしまった恋人を恨む①や、老いて姿は変わってしまったのに嘆きだけは変わらないと上陽人になり代わって歌った②などがある。四代の帝に仕えつづけた周防内侍にとって、身の上の大きな変化といえば宮廷生活から退くことであろう。本詠は、後冷泉天皇の死後に一時里下がりをしていた時期か、堀河天皇の内侍を辞したのちの詠となろうか。一首の構成の近さから、本詠を参考にしたとみられる③は、出家した知人への思いを歌っている。「あらぬ身なれど」は、同時代の俊頼・顕季の贈答歌④で顕季が置き所を同じくして用いるほかは、後代に第五句に置く例がいくつかあるのみ。これに対して、『詞花集』ほかに見える「あらぬわが身に」は、越の国へと下る人との別れを惜しむ⑤や、思うようにならない身の上を嘆いた⑥など、本詠に先行する用例がある。「あらぬ身なれど」と身の上が変わっても風流を愛する心は変わらないと一般的な心のありようを詠じるのに対し、「あらぬ我が身に」となると周防内侍自身の心を詠じたことが強調される。**○郭公待つ心こそ変はらざりけれ**…かつて郭公の初声を待っていたころと異なり、雅びとは無縁な境遇にいるけれど、それでも風雅を愛する心は変わらないと歌う。本詠は、つらくともかつての恋人を変わらず愛しているとする⑦と下の句が大きく重なる。

松尾にまいりて、帰りて、うちに葵参らすとて

37　なべてにはかけても言はじ君がため千代まつの尾のあふひ草をば

【底本】

まつのをにまいりてかへりてうちにあふひまいらすとて

なへてにはかけてもいはし君かためちよまつのをのあふひくさをは

【他出】

○『夫木和歌抄』夏一・二四八五

家集　周防内侍

なべてにはかけてもいはじ君がため千代まつのをのあふひ草見

て

この歌は、院の御時、松尾にまゐりて帰りて葵参らするとてよめると云云

【通釈】

（祭の使として）松尾大社に参詣して、（内裏に）帰って、主上（白河天皇）に葵をさし上げるということで。

ありきたりには決して言いますまい。主上のために千代を待ちのぞんで松尾社にめぐり逢った日の葵草のことを。

【参考歌】

松尾の祭の行事弁にてまゐりたるに、内侍の遅くまゐりて、夜に入りしかば

ゆふかけて雲の上をや出でつらん松のを山に夜ぞふけにける

返し　侍従内侍

①みあれにはゆふつくなると聞きしかばさこそは雲の上を出でつれ

松尾祭をもみあれと申すべきやらん、依不審式を引きて見給へれば、此社御祭みあれ載せたり、但此読人、賀茂祭之外諸社祭みあれとは言はず、などまではよも知られじかし、ことのあなづり甚不可然歟

（粟田口別当入道集・一〇七／一〇八）

同じ日、少将内侍、松尾の使に立つ。上卿二位中納言良教、弁親頼、公使ためなは、車かねとも。出衣菖蒲。繁き梢に郭公の初音を聞きて、少将内侍、

②　千早振る松尾山の郭公神も初音を今日や聞くらん

（弁内侍日記・四）

四月七日、松尾の使に立つ。上卿吉田の中納言為経・弁経俊。桂川を渡りしに、水上の方に、梁といふ物に、水のたぎりて落つる音の聞え侍りしかば、弁内侍、

③　川の瀬に梁打ちわたす水波のあまりも音のくだけ行くかな

（弁内侍日記・一五二）

四月八日、松尾祭使に立ちて侍りけるに、「内侍は誰ぞ」と上卿の尋ね侍りける折しも、郭公の鳴きければ

後深草院少将内侍

④郭公しめのあたりに鳴く声を聞く我さへに名のりせよとや

（玉葉集・神祇・二七六一）

⑤年をへて松のを山のあふひこそ色も変はらぬかざしなりけれ

（続古今集・夏・一九三・祐子内親王家紀伊）

⑥誰しかも松のを山のあふひ草かつらに近く契りそめけん

（順徳院百首・夏・二二）

⑦ともかくも言はばなべてになりぬべし音に泣きてこそ見せまほしけれ

（和泉式部集・一六二）

⑧思ふとも言はばなべてになりぬべし心のうちを人にみせばや

（続詞花和歌集・恋・四八九・堀河）

⑨打ちよする浪の花こそ咲きにけれ千代まつ風や春になるらん

（後撰集・慶賀・一三七四・よみ人しらず）

⑩ときはにてのどけきものはあめのした千代まつ枝の影にざりける

（小大君集・五九）

【語釈】

○松尾にまいりて…「松尾」は、山城国葛野郡（現在の京都市西京区嵐山宮町）にある松尾大社とその背後の松尾山をさす。祭神は、大山咋神と市杵島姫命。もとは秦氏の氏神であったが、朝廷から大社の称号が与えられて、東の賀茂西の松尾と並び称される王城守護の社となった。祭礼は、四月上申日（現在は四月二日）の勅使が参向する例祭、四月下卯日・五月上酉日の神輿渡御祭（松尾祭）等が著名。神輿渡御祭は出御祭と還幸祭に分れている。還幸祭は人々が葵をつけることから松尾葵祭とも。本詠と類似する例として、松尾祭の行事弁であった惟方と侍従内侍の贈答歌①がある。『弁内侍日

記』には、少将内侍（②・④）や弁内侍（③）が祭の使となって歌を詠じた記事がある。これらと同じく、周防内侍も松尾祭の使になったと考えられるが年次は不明。**○帰りて、うちに葵参らすとて**…「葵」は、ウマノスズクサ科の多年草である「二葉葵」のことで、二枚のハート型の葉をつけ、日影草とも呼ばれる。四月中酉日の賀茂祭（葵祭、北祭）はこの葉を牛車の簾や冠の飾りなどに用いた。「うち」は、返歌を二位（藤原親子）が行っているので、彼女が乳母をつとめた白河天皇のこと。還幸祭で葵をかざしとすることから、『堀河百首』の紀伊詠⑤や順徳院の百首歌⑥に松尾の葵草が詠まれるものの、賀茂祭の葵に比べて用例は少ない。**○なべてにはかけても言はじ**…献上する葵を、ありきたりの言葉では表現できない素晴らしいものだとする。周防内侍は六一番歌でも「なべて」を用いて、口に出すとありきたりになって自分の本心が伝わらないことを詠じている。類似例として、深い嘆きも口に出せばありふれたものになるとする⑦や、言ったとたんにありふれたものになってしまう恋心をそのまま見せたいと歌う⑧などがある。「掛けて」は「葵」の縁語。二句切れ。**○君がため千代まつのをのあふひ草をば**…千代を「待つ」と松尾の「松」、「葵」と「逢ふ日」が掛詞。「千代まつ」は、元服を祝う⑨や五十日の祝いで詠まれた⑩のように長く繁栄することを願う祝いの場で用いられた。『夫木和歌抄』は本詠を採録するにあたって、「あふひ草見て」・「言はじ」と言葉の対応関係がわかりやすくなるよう改変している。

【補説】

祭の使いをした折の周防内侍の歌は『金葉集』三二二番（『今鏡』藤波の中・三笠の松にも）にみえる。

摂政左大臣中将にて侍りけるころ、春日の使にて下り侍りけるに、周防内侍女使にて下りたりけるに、為隆卿行事弁にて侍りけるにつかはしける　周防内侍

いかばかり神も嬉しとみかさ山二葉の松の千代のけしきを

（金葉集二度本・賀・三二二）

また、本集二八・二九番と九三・九四番の贈答歌の舞台は、春日祭の勅使の休憩所があったとされる「梨原」となっていて、これらからも周防内侍が祭の使をつとめていた痕跡がほのみえる。

一方で、周防内侍が松尾祭の使に立った明徴はない。しかし、【参考歌】①～④にあげたように、内侍が松尾祭の使となった例はいくつも残されている。本詠も、周防内侍が自身の職掌として祭の使をつとめた例に加えておきたい。

返し、二位

38　我が君の御世のほどこそ知られぬれ千代まつのをのあふひ草にて

【底本】

返し　二ゐ

わかきみのみよのほとこそしられぬれちよまつのをのあふひくさにて

【通釈】

返歌　二位（親子）

我が君の御治世のありさまは、（まちがいなく世に）知られますよ。（あなたが主上の）千代を待ち望む松尾社の葵草によって。

【参考歌】

①我が君の御世ながひこの苗をしもひきつらねても植うる田子かな

（西国受領歌合・五番・田子・九）

②我が君の御世の流れの久しさはいつぬき川の鶴の千代まで

（実国集・祝ひ・八〇）

【語釈】

○返し、二位…「二位」は、白河天皇の乳母の藤原親子のこと。「二

位」については二番【語釈】参照。**○我が君の御世のほどこそ知られぬれ**…贈歌の下の句と、それに応じた本詠の下の句を受けて、白河天皇の御代の栄えは、あなたが差し出した松尾社の葵によって、まちがいなく世に知られると強調する。「我が君」は、親子が乳母をつとめた白河天皇。「我が君の御代」を用いる同時代の例は、後冷泉朝の末年以降に催行されたとみられる歌合で詠まれた①が残るのみ。少し下って、伊都貫川を用いて御世を言祝いだ②が詠まれたあたりから用例が出てくる。**○千代まつのをのあふひ草にて**…贈歌の表現「千代まつのをのあふひ草」を取り入れることで、あなたがくださった素晴らしい葵草によって、我が君の治世の素晴らしさが世に知られるようになるだろうと言祝ぐ。

【補説】

本集ではほかにも親子との贈答歌が残されているが、ここは互いに公的な立場で詠じている。

葵草を起点として、ありきたりの言祝ぎでは足りないくらい素晴らしい出来事にめぐり逢っているのだと周防内侍が詠じたのに対し、我が君の治世の素晴らしさはあなたが携えてきた葵草によって世に知られる、と応えている。

〔付記〕翻刻を許可してくださった　公益財団法人　冷泉家時雨亭文庫に深謝申し上げます。